

緋袴ひばかまの夜

なおいとしあき
猶惟寿昭

厚手のカーテンを引いて窓を開けると、曇り空から降りてくる冬の遅い朝の光と寒気が部屋の中に入ってきた。音もなく粉雪が舞い始めている。この辺りでも近年冬に雪の降ることは珍しくなったが、十二月初旬の今朝は昨晩からの小雨が明け方になって急に雪に変わっていた。綾子はいつもの通り八時少し前に家の前からバスに乗る。去年の四月以来勤めている神社に着くと、境内もうつすらと一面に雪に覆われている。

お守りやおみくじを扱った授与所じゅよしょがある棟の、奥の小さな控えの部屋に入り石油ストーブに点火する。部屋の暖まるのを待って腕時計を外し、通勤着を脱いで巫女みこの「衣装」に着替える。ブラジャーの上から白い厚手のネルの下着と短い木綿の着物を着る。小袖の白衣上着を重ね着して、膝まである毛糸の下着をつけ緋色の行灯袴あんどんばかまを穿く。白足袋を履けば準備完了だが、今朝の寒さに備えて使い捨てのカイロを懐に忍ばせた。

本殿のある建物とは授与所を挟んで反対側にある奥の住居から、神主の娘で巫女として綾子の先輩格にあたる礼子が渡り廊下を急ぎ足でこちらに向かって来た。朝の挨拶を交わし、二人して授与所のガラス戸を、そしてその外側の雨戸をすべて開け放つて冷たい外気を入れた。再びガラス戸を閉めると、綾子は境内に向かう。

社殿の中の掃除は男性である神職の仕事になっているから、巫女の礼子と綾子は社殿の周りの廊下の掃除や境内の庭を掃き清める。神社にとつての表玄関というべき境内の清掃は、主に年齢が若い綾子の朝の日課になっている。寒さに震えながら境内に薄く積もった雪を掃きはじめる。口から白い息を吐いて空を見上げると、雲で覆われた灰色の天蓋の奥からかすかに陽の光が透けて見えている。もうすぐ雪も止みそうだった。墨絵の中のような白く薄化粧をした静寂な広い境内で、鮮やかな緋色の巫女の袴がまるで氷上をゆっくりと滑るように動き回る。

九時に本殿の太鼓が鳴ると職員全員が社殿に集まって朝拝が始まる。それまでは清掃を終えたいといつもより急いで箒を動かしたが、今朝は清掃をいっ

たん中断しなければならなさそうだ。本殿に入ると、宮司から身を清めるお祓いを受ける。衿元を深く合わせた上衣の中から、汗が湯気となって首に立ち上ってくるのが傍目にも分かるほどだった。

地方都市とはいえ年の暮れも押しせまる今の時期、日が暮れて夜の街中に出れば会社やお役所の納会やら忘年会で賑やかなムードが漂っている。そして年が明けて新年となると初詣が控えているのだ。普段、神社にはとんと無沙汰という人でも、お正月には家族や友人と連れ立って参拝に出掛けてくるから、綾子たち巫女にとつても忙しい日々が続く。毎年、学校が休みになる暮れの一週間と正月の一週間は、高校生や短大生が二、三人アルバイトでお札づくりや参拝客におみくじを渡したり、巫女の仕事を手伝ってくれることになっているくらい賑わいとなる。

鬱蒼とした樹木に囲まれて普段は人影まばらな町はずれの綾子の勤め先にも元旦になると陽が上る前から町の人々が大勢集まってくる。境内の凜とした空気の中で白い上着に緋袴姿の巫女さんを見るとほっとした気持ちになる」と、綾子たちは顔見知りの参拝客から挨拶をされる。そんなときは、こそばゆいながらも幸せな思いに包まれるのだ。

先輩の礼子は来年の秋には結婚することが決まっていた。普通、神主かんぬしの娘の嫁ぎ先は神社に生まれるか神社に奉仕する神職が多いといわれているが、礼子の相手は隣町の会社員という。最近では地方でも恋愛結婚が普通になっているから、礼子の場合も高校卒業以来十年もの長い熱愛を経てのゴールインとなるのだった。

綾子は高校を卒業すると大学進学を諦め、祖父の時代から続く米穀卸売りの家業の手伝いをすることにしていた。いずれは、母と同じように婿養子を取って家業を継ぐことを考えていたのだ。両親から強要されていたわけではない。六歳年上の姉は東京の大学を卒業するとそのまま東京で就職し、親の反対を押し切って勤め先の上司との同棲生活を始めていた。兄も一人いるが、大学卒業後に地元の有力銀行に勤めて、その銀行の頭取の次女と結婚していたから、家業を継ぐことに対しては早くから拒否宣言をしていた。綾子の決断は当然の成り行きなのだ。半年ほどは忙しい家業の見習いをしながら張り切って働いた。高校時代からときおり店先に出て客の応対や電話の取次ぎ程度のこととは手伝わった経験があるから、フルタイムで働いて内向きの家事と併せて母を楽にしてあ

げられることが何よりも嬉しい。

そんな日常に思い掛けない事件が起こった。姉の博子が突然実家に戻ってきたのだ。やつれた体を心配した両親がしつこく説明を求めた結果、東京での生活に幻滅したこと、子供を墮胎したばかりであったことなどが涙ながらの話から判明した。それでも、両親の優しい愛情に育まれながら妹の綾子と一緒に実家の仕事を手伝ううちに、心も体もすっかり元気を取り戻した。

姉が戻って半年後、綾子は家業を引き継ぐことを姉の博子に譲ろうと心に決めた。外向けの父の仕事は別として、母と三人で分担するほどの仕事量でもなく、姉の方が嬉しそうにいそいそ働く姿を見ていると、何となく自分の存在感が薄くなっていくように感じはじめていたからだ。もっと外の世界で自分の可能性を試してみたい心境にもなっていた。考えてみれば、これまでいつも両親のそばで暮らして、外に勤めに出るといふ経験もなかった。姉から東京での生活について話を聞いて、興味はあったが必ずしもそこまで冒険はしたくない。

そんなとき、礼子の弟で綾子の高校の同級生の雄治が、一年前から親元を離れて通っていた東京の大学の春休みに帰郷する。高校の同窓会に出た二人は卒業式以来の再会を果たした。

二人は高校二年生のときの秋の収穫祭の夜に、神社の裏山で生まれて初めて唇を重ねた。お互いに固く閉じた唇を軽く触れ合うだけのものだった。それでも、これで大人の世界を覗いたような気持ちになった。心のどこかで雄治と将来結婚するかもしれないという予感が根を生やしつつあった。それ以来手も握ることもなく、付かず離れずの関係を保ったまま普通に仲の良い同級生として高校を卒業することになる。

その卒業式の晩に雄治が運転する車で、東京から大物歌手が来て地方公演が行われていた隣の公民館に出掛けた。熱狂して出演歌手を応援する若い観客たちに混じって楽しいひとときを過ごした。興奮を心の中に引きずりながら帰る途中、人気のない川の土手に車を止めると、雄治が車の外に誘った。川原に下りて行くと綾子はいきなり体を抱きしめられる。一年半前の時とは違う力強い腕の力と唇への圧迫感に綾子は立ったままじっと時間の過ぎるのを待った。やがて雄治の舌が綾子の口の中に押し込まれ、綾子のおわん形に熟した乳房が薄いセーターの上から雄治の手に包まれた。

車に戻った綾子は雄治に導かれるままに後部座席に並んで座ると、再び唇を重ね合わせ抱き合った。映画のラブシーンを思い出しながら恋人同士の抱擁を

楽しむ気持ちになつていった。

雄治が唇を離すと、じつと眼をつぶったままの相手を見つめて言った。

「綾子、君が欲しい。ずっと君が好きだったから。ぼくはもうすぐ東京の大学に行つてしまうから、今度いつ会えるか分からないんだ。いいだろう」

男の手が胸からスカートの中の下着に移っていたから、許諾を求める男の言葉の意味が全く分からなかったわけではない。純情な乙女とはいっても、すでに体の中は熱い血が煮えたぎって、頭の中はうれしさと恐ろしさの混じった不思議な恍惚感が充満していた。理性の働く余裕は半ば失われていた。あつという間の出来事だった。体の中心で小さく痛みが走った瞬間、体中の力が抜けていくのを感じた。十八年間大切に守ってきたものを奪われてしまったという実感があつたのは、しばらく時間が経ってからだった。

雄治のことは嫌いではなかったが、嫁入り前までは大事にしておきたいと思つていたから、悔しくて泣いた。雄治を責める気持ちよりも自分が空しい気持ちに襲われたのだ。これまで大切に守ってきたものとは一体何だったのだろうか。あつけない喪失感であるし、こんなことだったのだ、という思いが強かった。卒業式の夜、狭い車の後部座席で重なりあつて。雄治のために与えることができたのだから、雄治が喜んでくれればいいと。夜空に瞬く星のひとつが流れ星となつて落ちていくのが眼にたまつた涙を通して見えた。

相手の雄治にとつても初めての体験だった。卒業式のあつた記念すべき夜に、もう直ぐ故郷を離れ東京へ行つてしまふ前にどうしても男になつておきたい、そんな気持ちで入念な計画を立てて臨んだのに、達成感とは程遠い惨めな一瞬だった。好きな綾子に対する罪の意識も心に重く押し掛かった。

それから間もなく、神職の資格を得て家業を継ぐために、東京での学生生活を始めることになる。綾子を実家の巫女のアルバイトに頼んだのは、一年後の春休み帰郷で再会したときのことだった。

神社は普通年末からは本格的に忙しくなる。別格の伊勢神宮はともかくとして、綾子の勤めるような一般の神社では、一月一日が繁忙のピークとなり、三日からは参拝者の数もかなり減ってくる。巫女たちもようやく精神的に余裕が出てくるが、それまでは忙しい日々が続く。それでも一月いっぱいには厄祓ヤクハラや家内安全の御祈祷なども多く、授与所に詰める巫女の仕事も二月の節分祭や建国記念祭などの行事が終わるまでは気が休まらない。それを過ぎて三月の声を聞くこゝろをきくと受験合格祈願などの人出のにぎわいも少なくなり、神社は忙しさから開放

される。雄治から綾子にアルバイトの声が掛かったのは、その年の二月末に、四年ほど勤めた巫女が結婚で辞めて、常勤巫女が礼子一人になっていた時期と重なる。

アルバイトをはじめて半月後には、礼子と雄治の父親である宮司から「常勤の本職巫女にならないか」と話しを持ちかけられた。礼子もやがて結婚してサライーマンの妻になってしまふ。特別有名ではないが、本職巫女がこれまでも常に二人は常勤していた由緒ある格式と規模の神社である。綾子はこの静謐な環境が好きだったから、両親に相談することもなく常勤を決断した。

本職巫女になるのには、神職にとつて必要な神社本庁に定められる特別な資格は要求されないし、試験もない。昔から巷で流布されていたように処女である必要もまったくない。実際、綾子には過去があるから処女性を問題視されるのだったら、はじめから巫女になる資格はないのだ。

礼子のように二十台の後半になると結婚を期に辞めるのが普通だとはいえ、厳密な意味での定年もないし、結婚したら辞めなければならぬという規定はないのだ。綾子は、もし望むなら結婚後も巫女を続けていいとも言われた。もつとも、お産の前後の期間は袴を穿いて仕事をする事はない。「結婚すると血服ちびくの関係で、実務的に難しいことがあるから……」と宮司から説明を受けた。女性は産後一ヶ月間を穢ケの状態とみなされ、社殿に上がるのを遠慮しなければならぬ。これを「血服」というのだそうだ。やはり現実には、若く清楚な感じの女性であることが必要条件であるような巫女のイメージが広く定着している。当時十九歳の綾子は性格もおとなしく、あと五、六年は奉仕できそうだから宮司のお眼鏡に叶ったのだろう。

一通りの礼儀作法や神社用語などを宮司やその下の神職、そして先輩の巫女である礼子から教わった。巫女舞や儀式など覚えることはたくさんあって、すぐにはすべてを覚えられないから必要に応じてその都度習うものも少なくない。中でも綾子が一番好きなのは、お祓いを受けに来る氏子うぢこの前で神楽鈴かぐらすずを手首で回しながら、背筋をまっすぐに伸ばして踊る巫女舞だ。踊りの所作そのものは単純で繰り返しが多い。無心に踊っていると神に仕えていることを体全体で実感でき、同時に自分の舞を通して人の役に立っていると感ぜられるのが嬉しいのだ。ただ一度の過ち、というより綾子にとっては事故のような傷から心身を清められる気もした。それに相手は、ひよっとすると将来自分の伴侶となる宮司の跡継ぎなのだから。

巫女の生活にもすっかり溶け込んで、神に仕える神社の仕事への理解が深まった二年目の夏がやって来た。年間を通じての祭礼や神事の他に、氏子のお宮参りや神前結婚などで綾子が踊る巫女舞も大分上達した。もうすぐ嫁に行く礼子はだんだんと表舞台から裏方の仕事に徹するようになっていた。

夏は巫女の衣装の小袖やその下に着ける下衣、そして袴も冬のものとは違って薄手の生地を使用しているから、動きが軽くなって着ていても気持ちがいい。この時期、五時に本殿の太鼓が鳴ってから授与所を閉じて清掃と片付けを行っても、外は未だ明るいし、境内には参拝客も誰ひとり残ってはいない。家族のいる通いの神職も帰りを急ぐ。

綾子は着替えて家路につく前に、扉が閉じられた薄暗い拝殿の中に入り黙々と舞の練習をすることがよくある。その晩も半時間ほど舞っただろうか。ふと気がつくと拝殿と授与所を結ぶ渡り廊下に人影があるのに気がつく。雄治だった。夏休みで戻ってきていたのだ。宮司からも、昼前に所用で表に出てきた宮司の奥さんからもその日の雄治の帰郷の話は出なかった。礼子の婚礼準備のために宮司一家が三人揃って出掛けることは聞かされていたのに。

「姉よりも上手だね。凜として近寄りがたい厳かさがあったよ」。そう言いながら綾子を追って授与所の奥の控えの部屋まで付いてきた。

「そうか、もう学校は夏休みになったのね。今日帰ってくるとは誰からも知らされてなかった。お帰りなさい。雄治君も一段と男らしくなって、一周りも二周りも大きくなったみたい。眩しいくらいだね」

「綾子だつてすっかり女らしくなったよ。もうあのとときの少女じゃないよね」と言っつてぎこちなく微笑んだ。

「着替えて家に帰るから」と雄治に部屋を出るよう促し電気をつけようとした瞬間、雄治は部屋の扉を後ろ手に閉めると立ったままいきなり体を強く抱きしめてきた。半そでの開襟シャツと半ズボンの雄治に対して、綾子はまだ巫女の姿のままだ。無言で、しかし力強く両腕を振り上げて抗ったが、若く精悍な男の力には及ばない。ひんやりとした畳の上に二人して倒れこんだ。襟元から入った男の右手は、二十歳になったばかりの女の熟した乳房を覆うブラジャーの中をまさぐっている。短く薄く生えた無精ひげが頬をこすり、男の舌が固く閉じた歯の間を割って入ろうとしてくる。袴の腰紐が解ける。一度許した相手ではあつたし、心の隅で将来の夫になる相手と半ば決めていた。そこに隙があつたのかも知れない。

放心したような綾子の顔には涙の跡はない。顔を横に向けると脱がされた袴がすぐ傍にあつた。暗い部屋の中で、本来の明るい緋色の鮮やかさがどす黒い血の色に見えた。

薄暗闇の畳の上で、雄治が沈黙を破った。「ごめんな。我慢できなかったんだ。東京にいてもずっと綾子のことを想っていたよ。ぼくの結婚相手は綾子しかないと前から決めていたから。卒業したら、二、三年は他の神社で修行して来るけど、ここに戻ったら必ず結婚しよう。近い内に機会を見て、親爺とお袋にも話しておくから」。必死にプロポーズの言葉を吐いた。

「雄治君のことはもう許せない。けっして嫌いじゃなかったのに。どうして私が神聖に思っているこの場所で、しかも巫女の姿でいるときに。雄治君だって将来は神様にご奉仕するために勉強中の身でしょ。私のことが好きだからといって、私の体をこんな形で求めてくるのは汚らわしいわ。明日私は宮司に辞職届を出すわ。もうここにはいたくないから」。綾子の声はかすれて小さかったが、背中を向けて横になった雄治の方も見ずに、真つ暗な天井を見上げながらきつぱりと強い意思を込めて言った。

「本当にごめん。結婚するまではもう二度と体を求めるようなことはしない。だから許して欲しい。今日は君にプロポーズして、その上で出来ることならもう一度体を求めようと思っていたんだ。だけど、思いもかけずに綾子の踊る巫女舞を初めて見て、その神々しさに打たれて声も掛けられなかった。この部屋に入ったら、電気が走ったように、何がなんでも君の体の中に入ろうと」

雄治も体の位置を変えずに、声を出して嗚咽していた。

「とにかくここを辞めるなんて言い出さなくてくれ。ぼくだって東京で真面目に勉強しているし、他の仲間たちのようにお酒を飲んだり女の子と遊び歩いたりはしたこともないんだ。東京では本気で『敬神生活の綱領』の実践に努めていたんだから」。最後の「敬神」の言葉は、常勤の巫女の仕事を始めるに当たって、最初に宮司から聞かされたていた。綾子は頭の中で復唱する。

天地悠久の大道である神道は、崇高な精神を培い、太平を開く基である云々 不思議と綾子の怒りが少しづつ収まっていく。強引に女性と交わったばかりの若い男性からでた敬神の言葉に、思わず「綱領」の一部を思い出している自分にもこっけいさを覚えた。

長い沈黙の後、綾子は身支度を整えると黙って神社を後にした。帰り道すがら初夏の夜の涼風に当たると、雄治のことを許す気持ちになつていた。

明くる日、何もなかったように職場に顔を出した綾子を、礼子が顔全体に喜びを表して出迎えた。

「昨夜家に戻ったら雄治が東京から戻っていてね。綾子さんと結婚したいって両親の前で言い出すのよ。あなたたち、何時からそんな間柄になっていたの。もつとも、雄治の話では、あなたにその意思があるかどうかは分からないというんだけどね。両親は大賛成みたいだし、私も是非そうなって欲しいと思うわ。あなたが将来ここにお嫁さんとしてきてくれるなら、安心して私もお嫁にけるしね。ねえ、綾子さんもこの話まんざらではないんでしょ」

綾子は、首を傾けながらきよとんとした顔を礼子に向けて見詰めた。昨晩の雄治の行動を心の中では忘れようと努力しながら、結婚については全く気持ちが傾斜していなかった。

「礼子さん、私は巫女の世界は好きですが、心のどこかで別の世界も見てみたいと思うようになってるんですよ。雄治さんは結婚相手として申し分ないのかもしれないと思っています。でも、今のうちに世界の外を見てくるのも価値があるんじゃないかと思ひ始めています。すぐ巫女を辞めて、皆さんにご迷惑を掛けるようなことはしたくはありません。礼子さんが結婚される前には新しい巫女さんに来てもらって、その人が慣れた頃に私の後任の人を探していただくように宮司をお願いしようかと思っています」

これだけのことを一気に言うと、夏の日差しが強くなる前に境内の清掃を終えようと急いで巫女衣装に着替えた。箒の手を忙しく動かしながら、昨夜の雄治の荒々しい息遣いと精悍な体の動きを思い出している自分に気がつき、思わず顔に血が上るのを覚えていた。

頭の中は未だに幼さを残している雄治の成熟した力強い肉体がそうさせたのだろうか、身も心も一人前の女になった自分を感じて、綾子は新しい世界に飛び出そうと決心していた。(完)

本文文字数〃、7,826文字

400実原稿用紙〃20枚